



1/10 中1、2年生の道コン

1/11 中3生の道コン



1/24 (土) 中3生 苦手な社会の歴史特講

1/25 (日) 中3生 全国公立高校入試問題 塾内テスト



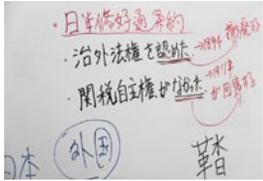
学力コンクールの結果を基に面談を受ける富岡さんと川村君

1/27 倍率が発表になったので分析結果を解説



いつも、マイペースでひょうきんな和ちゃん、今年も5年生。

富中1年の松岡君、寝ないでね。 景中2年の中野君が栗野君と。



悪天候に負けず歩いてきた3年生の松井さんと佐藤さん。



栗野君と木村さんと大本先生で蛍光灯を修理。 蛍光灯を押さえながら余裕でピースの木村さん。



入試直前ゼミ⑦
携帯電話の電源保持禁止
携帯電話の電源は保持禁止。連絡は塾の電話を使用して下さい。

入試直前ゼミ⑤
★1000分特講★
入試直前ゼミ⑥
★1000分特講★ 休塾

入試直前ゼミ④
★高専入学試験★ 休塾
★志望校変更後倍率発表
入試直前ゼミ②
★北星短大入学試験★
入試直前ゼミ③ 休塾

入試直前ゼミ① 休塾
★志望校変更締切
1月31日の夕方、気がいたら塾の前を見たことのないホイールローダーが除雪をしていた。町ではこんなことをしてくれるはずが無いし、どうしたんだらうと話していたら、木村侑里さんが「あっ、お父さんだ」と。わざわざ塾の除雪に来てくれました。職人技のような除雪のビフォー・アフターでした。本当にありがとうございました。

★公立高校・高専の倍率発表★
1月27日、公立高校の倍率が発表になった。予想通り湖陵、江南、北陽の上位3校は倍率が低かった。特に理数科の倍率は毎年2倍を超えるくらいなのに今年は1.26倍で不合格は8名、普通科は1.01倍で不合格は1名で合計9名しか不合格にならない。江南は1.21倍で不合格は38名、北陽は1.13倍で23名が不合格と数字上はなっている。例年なみの当日欠席分（主に高専と私学）を考えると3校とも定員割れに近い。上位校を目指さない進路指導と安易に勧める推薦、釧路の学力が高くなるはずが無い。高専の倍率も、昨年は3.22倍で今年は2.46倍と下がっている。しかも公立高校との併願で、大多数は公立高校に行ってしまうので、毎年定員割れすれすれの状態が続く。

高専を敬遠する理由は、高専に対する誤った認識を父母や生徒が持っていることにある。5年は長い、勉強が大変でついていけない、留年があるなどマイナスのイメージが大きい。このことを理由に中学校や塾の先生ですら高専を勧めないという話をよく耳にする。高専へ行っても通用しないような生徒は結局どこへ行っても通用しない。過保護な環境で育ち、楽な道を選択し、コミュニケーション力の無い若者を企業がほしがらざるは無い。格差は「大変な方を選択するか楽な方を選択するか」でついてしまう。14年12月の釧路の求人倍率は1.07倍で、15年3月新規高卒者の就職内定率は12月末で78.7%でしかない。このような状況の中で、釧路高専の求人倍率は17倍から20倍以上である。理系で工業系だと思った高専を目指すべきだ。

★ホップ・ステップ一〇〇号★
今回でホップ・ステップが一〇〇号になった。作り始めてから8年以上が経ったことになる。文章を書くことが苦手な私としては、毎月ホップ・ステップを作ることは結構大変だった。それでも、塾での生徒の様子、いろいろな情報や考え方を伝えられることの意味はあったと思うし、ホップ・ステップを楽しむにしてくるお母さんもいてくれたことで続けてこられたと思う。勉強したいと思うことが「ホップ」、そう思った人が勉強することが「ステップ」、そして自分の将来のために決断することが「ジャンプ」。ホップとジャンプは自分の意思で、塾は「ステップ」で皆の勉強のお手伝いをするだけ。塾の名前とホップ・ステップにはそんな意味が込められている。

★石山君が施設長に★
1月10日、8期生の石山君（富中・湖陵・札幌医大）が1年ぶりに塾に来てくれた。言語聴覚士として札幌で仕事をしていた彼が、「札幌は発達デザイナー」の施設長になったという。がんばってきたことが評価され、30代となった卒業生たちが社会で大事なポストにつくようになってきた。
★除雪ビフォー・アフター★
1月31日の夕方、気がいたら塾の前を見たことのないホイールローダーが除雪をしていた。町ではこんなことをしてくれるはずが無いし、どうしたんだらうと話していたら、木村侑里さんが「あっ、お父さんだ」と。わざわざ塾の除雪に来てくれました。職人技のよ

2月の予定

■高専を競争力強化の切り札に■

企業経営者と人材に関して議論すると、高等専門学校卒業生に話が及ぶことが多い。彼らによれば、**人材不足が顕在化する前から高専卒業生は引っ張りだこで、なかなか採用できない状況にある。**

独立行政法人国立高等専門学校機構によると、全国で国立高専51校の入学定員は9400人。本科（5年制）を卒業した後、半数内外が専攻科（2年）または大学に編入学するが、**就職希望者の就職率はほぼ100%、求人倍率は1.5倍にのぼる。**

企業が高専生を欲する理由は、第1に、大量退職を迎えている団塊世代が培ったものづくり技術の伝承者としての役割である。第2に、実験室にとどまる研究者に加え、顧客との対話を通じてイノベーションを実現する「技能者」として高専生の重要性が増している。製造業のサービス化に伴い、付加価値の創造が製品販売時点から販売後の顧客対応へと移っているからだ。

一方で、現在の高専制度に対して改善を望む声も聞く。まず、語学とIT（情報技術）能力の強化である。特に語学は喫緊の課題だ。企業の海外展開で最も不足している人材が、現地工場において日本のマザー工場で構築された製造技術を現地に移植する技術者であることを考えれば、当然のニーズである。非製造業からは、もっと自分たちの業界の専門人材を育成してほしいとの声もある。非製造業は研究開発や生産性の面で立ち遅れており、産業競争力を強化する観点からも高専人材の育成・活用は有益である。

他方、学生側からは大学でなく高専をより積極的に選択できるような経済社会の対応も求められよう。英国等では「高専の大学化」の動きもある。単に学位を与えるだけでなく、企業側が高専生の生涯にわたる明確なキャリアパスを提示するとともに、社会の認知度を向上させるといった取り組みが望まれる。

つむぎNEWS 15.01.06

『貧困と東大』朝日新聞デジタル 14.11.25

脱・貧困のための進学が…授業料高騰、重い奨学金返済

大手メーカーに勤める朝倉彰洋さん（25）は東大生だった2009年、そんなテーマで調査した。

東大が行った「学生生活実態調査」では、東大生の親の年収は「950万円以上」が過半数を占めている一方、「どれくらいの貧困層が広がっているのか、知りたかった」。自分が入居していた学生寮は経済的な困難を抱えた学生が多く、アンケートを配ってみた。49人の回答者のうち、親の年収が300万円未満の学生が15人いた。

「貧困層でも支援制度の存在をもっと広く知ってもらえれば、家庭の経済状況に関係なく東大に進学できるはずだ」

朝倉さん自身、母子家庭で育った。母親には「勉強にかかるお金は出してあげる」と言われていたが、愛知県から東京への進学を伝えると一転、「行かせるお金はない」と反対された。国立大学の授業料（標準額）も、1975年度の3万6千円が、いまは約15倍の53万5800円かかる。

そもそも中学時代は大学進学も考えていなかった。高校の先生の助言を受けながら、授業料の免除を手にした。給付型奨学金も得て大学院にも進んだ。「制度を教えてくれた中学や高校の先生、一緒に東大を目指した仲間、どれか一つでも欠けていたら進学できなかった。自分は運が良かった」

愛知県春日井市のショッピングセンターの一角。週に1度、約2時間、大学生のボランティアが、中学生たちにほぼマンツーマンで教える。生徒は生活保護世帯や母子家庭の子ら約15人だ。

その一人、中学3年の女子生徒（14）も母子家庭で育った。塾に通うのはあきらめていたが、教室に通いながら、商業高校への進学をめざす。卒業したら、すぐに就職するつもりだ。「大学に行くお金はないし、就職したら母が楽になるかな、と思って」

この教室に中学3年の長男（14）を通わせる母親（38）は、「息子はなんとかか大学まで行かせたい」と話す。夫（38）は病気がち。介護の資格を取ってパートで家計を支えてきた。経済的に豊かな人はどんどん上に行くのに、貧しい人は貧しいままだと感じる。「息子には繰り返してほしくない。踏ん張って上がってほしい」と願う。

貧しくても能力を発揮できれば、未来を切り開けるのが、教育だった。だが、経済格差が拡大するなか、貧困を脱するための教育の平等が揺らいでいる。

■バイトを掛け持ち「もう大学やめたい」

経済的に苦しいと、進学しても道は険しい。授業料の借金が重なり、家庭に負

担がのしかかる。

宮城県に住む保育士の母親（50）は、非正規雇用で稼ぐ月収約13万8千円で子ども2人を育てている。私立大学に通う長女（20）は、公立高校に進学時から貸与型奨学金の「借金」を背負ってきた。大学でも奨学金を二つ借りたので、卒業時の残高は、合計260万円に上る見込みだ。中学2年の長男（14）が高校に進学すれば、新たな借金が重なる。

小学校教諭を目指す娘は、奨学金返済のためにレジ打ちなど二つのバイトを掛け持ちする。だが朝5時に起きて夜中まで学業とバイトに明け暮れる毎日。友人とのつきあひもできず、娘は夏になって「バイトがきついで、もう大学をやめたい」と言い出した。

「バイトをやめてもいいよ、と本当は言ってあげたい。でも、今やめたら150万円の借金はどうするのと言うしかない」。無事卒業できても、借金を返せる職につけるか、確たる保証はない。「貧乏から脱出させるための進学でも、借金が増えるだけの『降りられない賭け』になっている」。母親の悩みは深い。

■奨学金受ける割合52.5%

子どもの貧困率が過去最悪を記録する一方、国立大学の年間授業料は40年前の約15倍。奨学金という名の「借金」に頼らざるを得ない家庭は増え続けている。日本学生支援機構によると、昼間の4年制大学に通う学生のうち、奨学金を受けている割合は2012年度に52.5%に達した。10年前より20ポイント以上も増えた。奨学金を受けている人のうち、約9割が貸与型だ。

名古屋市の杉山智哉さん（20）は、父が交通事故による後遺障害で思うように働けず、苦しい家計状況で育った。大学2年の途中で学費を払えなくなり、除籍に。高校、大学で受けた奨学金約350万円が借金となって重くのしかかる。

子どもの貧困対策について考える集会などに参加し、「知識が無いと解決法も分からない。無知は貧困につながる」と思うようになった。貧しいと、知識を身につけるための教育さえ受けられない。「貧乏なら働け」という考えが、貧困の連鎖を生んでいると思う」（杉原里美、山本奈朱香、河原田慎一）

■学費の壁、米・豪学生も

「格差是正の装置」と見られてきた教育が、財政状況の悪化を背景に学費の高騰によって脅かされつつある。経済協力開発機構（OECD）によると、「教育は福祉」という理念があるフランスやオランダでも学費が上がっている。

05年からの6年間で学費が28%上がった豪州では、シドニー大3年のカイル・ブレイクニーさん（21）が怒りをぶちまける。低所得層が多い先住民アボリジニーで、「貧困から脱するための高等教育を、貧困だから受けられないのでは絶望的」と憤る。「多文化主義国家と自称しながら、先住民や移民の子に『貧乏人は弁護士や医者になるな』と言っているようなものだ」

保守連合のアボット政権は、大学への財政支出を減らし、最大300億豪ドル（約3兆円）の歳出削減案を打ち出している。法案が国会を通れば、修士号取得までにかかる授業料は現在の数万ドルから、2年後には世界でも最高級の10万豪ドル（約1千万円）以上になるとの試算もある。

豪州では約40ある大学のほとんどが国立で、1989年までは無料だった。「今の時代に生まれたから10万ドルかかるなんて」。低所得層の生徒が多く通うシドニー郊外の高校生グレイス・ハーリーさん（17）はため息をつく。

米国でもこれまでは、貧しい家庭で生まれ育っても大学を卒業すればいい職につき、中流階級に入れると言われてきた。しかし、米国の大学でつくるNPO「カレッジ・ボード」によると、4年制大学の1年間にかかる費用は、昨年の私立大学の平均で約3万1千ドル（約370万円）にのぼる。インフレ率を考慮しても、30年前の約2.5倍だ。公立、一般私立大の卒業生の約6割が借金を背負い、平均借入額は約2万7千ドル（約320万円）に達するという。

NPO「学生借金危機」の創設者、ロバート・アップルボームさんは「借金のために、卒業しても家や車の購入ができず、起業できない人は多い。経済全体にも悪影響を与えている」と指摘する。（シドニー＝郷富佐子、ニューヨーク＝中井大助）

■進学費用は税金で

政府は貸与型の奨学金で機会の不平等の問題を解決しようとしたが、それは借金でしかない。負の遺産は親から子に引き継がれ、固定化している。大学に行けない人には、低所得だと返さなくていい所得連動型奨学金にして、私立大も国立大並みに授業料を引き下げ、進学費用は税金で負担するべきだ。親が支払うという意識を変える必要がある。高卒者と大卒者の将来得られる所得格差が広がる中、大卒者の生涯所得から得られる税収は、公的に投入した額を十分上回る。大学の授業料は、消費税1%分の額でしかない。大学は親の負担で18歳の子が行くところから、みんなで負担して、みんなが人生で一度は勉強するところになればいいのではないかと。矢野真和・桜美林大学教授